

スを所有する場合には必ず記入する。和文は10 ptの明朝体で、英数字は10 ptのTimes New Roman体で記述する。

4. 要約とキーワード

所属の下に3行の空白をおいて要約を250文字以内で記述する。なお「要約」は10 ptのゴシック体で中央に印字し、要約本文は10 ptの明朝体で記述する。

要約の下に1行の空白をおいてキーワードを10 ptの明朝体で左寄せで記述する。

なお、要約中において既往の研究について文献をあげて述べたい場合には、後述の本文中で用いる右上添字の文献番号は利用できないので、著者と発刊年を用いる。（例：「本研究ではPaulay (1976)の手法を拡張する。」）

5. 本文と見出しなど

5.1 本文

キーワードから2行の空白をおいて、本文をはじめる。フォントについては、和文は10 ptの明朝体で、英数字は10 ptのTimes New Roman体で記述する。章の見出しは10 ptのゴシック体として、1行空けて本文を続ける。章の見出しのピリオドは半角「.」で、半角の空白のあとに見出しを続ける。本文の句読点は全角の「，」と「。」で統一する。段落設定は両端揃えの配置とする。

5.2 節の小見出しなど

節の小見出しも10 ptのゴシック体として、改行してすぐに本文を続ける。各パラグラフの先頭は1字下げて始め、パラグラフ間には空白を設けない。節の見出しのピリオドは半角「.」で、半角の空白のあとに見出しを続ける。

5.2.1 項の小見出しなど

項の小見出しも10 ptのゴシック体として、改行してすぐに本文を続ける。項の間には空行は設けない。

5.2.2 項の小見出しなど

項の見出しのピリオドは半角「.」で、半角の空白のあとに見出しを続ける。

6. 数式

数式は中央に印字し、式番号は(1), (2), として式の最後に右寄せして記す。なお式の上下には1行ずつの空白を設ける。本文中で式を引用する場合は式(1)のようにする。

$$V_u = P_w \sigma_{wy} b j \cot \phi + b D (1 - \beta) v_0 \sigma_B \tan \theta^* \quad (1)$$

7. 図・写真・表・脚注

図・写真の番号、タイトルはその直下に、表の番号、タイトルはその直上に、それぞれ10 ptのゴシック体で記入する。図・写真および表の呼称は図1, 写真1, 表1, のようにして、論文全体を通して番号を振り付ける。なお図, 写真および表の左右には、原則として文字を流し込まない。図, 写真および表は本文から1行空けたあとに貼付する。

図・写真はカラー表示とすることを認める。

脚注¹を入れる場合の書式は、ここに示すとおりである。

¹脚注が必要な場合には引用ページの直下に、左端から5.0 cm程度、0.5 pt幅の線を引いた下に、2行程度の範囲で10 ptの明朝体で記述する。

表1 観測地震動

日付	時刻	1F			5F	
		計測震度 相当値 (水平2方向 による)	最大加速度 (m/s ²)		最大加速度 (m/s ²)	
			N/S (梁間)	E/W (桁行)	N/S (梁間)	E/W (桁行)
10/23	17:56	4.4	0.72	1.07	1.78	3.26
	18:03	3.1	0.23	0.27	0.51	0.68
	18:12	3.1	0.12	0.25	0.43	0.70

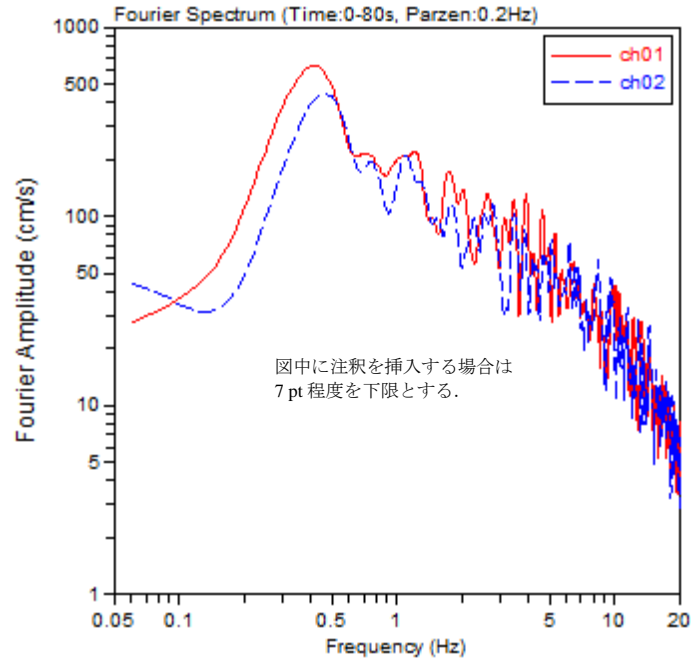


図1 観測波のフーリエスペクトル

8. 使用する単位とフォント

単位は原則としてSI単位系に統一する。提出された論文の書誌情報はxml形式でJ-STAGEに登録される。この際、J-STAGE側で用意してある書誌XML作成ツールを用いて論文（PDFファイル）から書誌情報を自動生成する際の要件として、下記のようなフォントの指定がなされているので、これに従うこと。

表2 jae_e_書誌XML作成ツールで指定されているフォント

テンプレート名	jaee_basic	
テンプレート項目	フォント名	フォントサイズ
記事タイトル(日)	MS Pゴシック	14.0
著者(日)	MS 明朝	14.0
所属(日)	MS 明朝	10.0
抄録(日)タイトル	MS ゴシック	10.0
抄録(日)	MS 明朝	10.0
キーワード(日)	MS 明朝, 斜体	10.0
参考文献	(日) MS 明朝 (英数) Times New Roman	10.0
記事タイトル(英)	Times New Roman, Bold	14.0
著者(英)	Times New Roman	14.0
所属(英)	Times New Roman	10.0
抄録(英)	Times New Roman, Bold	10.0
キーワード(英)	Times New Roman, Italic	10.0

9. 謝辞

謝辞がある場合には、本文の結論の末尾に和文は10 ptの明朝体で、英数字は10 ptのTimes New Roman体で記述する。

10. 参考文献

参考文献のリストは、10 ptの明朝体で記述する。参照した順に番号を振って、結論、謝辞のあとに、記載例に従って記載する。記載方法については、[日本地震工学会論文集の執筆要領を参照すること](#)。

本文中での参考文献の表示は、該当箇所に文献番号を右上添字で1), 2), …と記す。著者を含めた記載としたい場合には次の例文を参考にされたい。「この研究はPaulay¹⁾によって始められた。その後、久保・小原²⁾、建築・白川³⁾、高畑ら⁴⁾、Takeuchi et al.⁵⁾によって発展した。1980年代までの研究成果^{1),2)}と比較すると、それ以降の研究成果³⁾⁻⁵⁾では. . .」

謝 辞

本論の作成に当たっては、関係各位のご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

参考文献

- 1) Paulay, T.: Moment Redistribution in Continuous Beam of Earthquake Resistant Multistory Reinforced Concrete Frames, Bulletin of New Zealand National Society for Engineering, Vol. 9, No. 4, pp. 205-212, 1976.
- 2) 久保哲夫, 小原明: RC造骨組に関する研究, 日本建築学会梗概集, Vol.C, pp.719-720, 1987.